殉教者を想い、ともに祈る週間

改訂版

―福者ペトロ岐部司祭と187殉教者の列聖に向けて―

日本カトリック司教協議会

列聖推進委員会　編

福者ペトロ岐部（きべ）と 187 殉教者の取り次ぎを願い、その列聖を求める祈り

いつくしみ深い父よ、
福者ペトロ岐部と 187 殉教者は、
復活のいのちを約束してくださるあなたの愛に希望を置き、
自らキリストの十字架を担い、
その死を身に帯びる生き方を選びました。

殉教者の取り次ぎによって祈ります。

現代に生きるわたしたちが、どのような困難なときにも
聖霊の助けに信頼し、キリストに従い、
あなたへの道をひたすら歩むことができますように。

また殉教者のあかしが、
世界に生きるすべての人の希望となるよう、
ペトロ岐部と 187 殉教者を
一日も早く聖人の列に加えてください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

（2008 年 6 月 5 日　日本カトリック司教協議会認可）

表紙　三牧樺ず子　画

目 次

この手引きの使い方 …… 2
初版の序文　ペトロ岐部と 187 殉教者…… 4
　はじめに…… 4
　「ペトロ岐部司祭と 187 殉教者」の列福運動は、
　どのようにして起こったか…… 4
　候補者はどのように選ばれたか…… 5
　列福のしくみ…… 7
　188 殉教者の現代的意義 …… 9
　結びに…… 11
「殉教者を想い、ともに祈る週間」改訂版に寄せて …… 12
日本の教会の霊性…… 14
　霊性とは…… 14
　わたしの「記念」として…… 14
　日本の教会の「共通の記憶」を保つために…… 15
第 1 日　殉教者があかししたもの…… 17
第 2 日　殉教者のあかしから生まれ育つ教会共同体…… 19
第 3 日　あかしする教会によって支えられたキリスト者…… 21
第 4 日　殉教者を育んだ家庭…… 23
第 5 日　女性の召命と使命…… 26
第 6 日　明日の教会を託される子どもたち…… 29
第 7 日　羊のためにいのちを捧げた司祭・修道者たち…… 32
第 8 日　秘跡に生かされる教会…… 36
福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者一覧…… 39
福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者分布図…… 40

この手引きの使い方

神が殉教者たちをとおして日本の教会に与えてくださる救いの歴史を、日本の教会の共通の「記憶」（アナムネーシス）として祝い、信仰生活を支える「霊性」にしたい――このような思いを新たに、ペトロ岐部（きべ）司祭と187殉教者の列福10周年を機に、この冊子の改訂版を発行することにしました。この手引きは、個人はもとより、教会や家庭、友人や修道会など、共同体の祈りの機会に使用されることをお勧めします。

各テーマの構成

ペトロ岐部司祭と187殉教者の列福10周年に当たり、日本の教会が共有する神の救いの「記憶」を保つために、歴史の中で起こされた不思議なみわざをとおして語られる神のことばに耳を傾けます。それは、現代に生きる日本の教会を方向付ける「霊性」を見いだし、確認する作業でもあります。この冊子は、日本の教会の豊かな霊性を知り、黙想するために、毎日、独自のテーマを示します。

8日間の黙想の要点と祈りのテーマ

第1日　殉教者があかししたもの
第2日　殉教者のあかしから生まれ育つ教会共同体
第3日　あかしする教会によって支えられたキリスト者
第4日　殉教者を育んだ家庭
第5日　女性の召命と使命
第6日　明日の教会を託される子どもたち
第7日　羊のためにいのちを捧げた司祭・修道者たち
第8日　秘跡に生かされる教会

一日ごと、8日間に割り当てられている上記のテーマは、どれも、つぎのように構成されています。

1. テーマにちなむ殉教者のことば、または当時の宣教師による報告書の抜粋
2. テーマを深めるための聖書のことば
3. テーマを味わい、黙想するための解説またはヒント
4. 黙想と分かち合いの要点
5. 祈り

また各テーマは、どれもつぎの三つの要素を含んでいます。

第一は、記憶と記念です。殉教者の出来事を思い起こして、それをこころに刻み込みます。はるか昔の出来事であっても、それが、時空を超えて、いま目の前に再現される思い、それが記念です。

第二は、「祈り」です。神が殉教者たちをとおして与えてくださる救いの出来事を祝い、祈りながら、その意味を深めます。

第三は、黙想と分かち合いです。祈りの中でいただいた光を分かち合うことにより、殉教者の信仰と心情をいまの生活に重ね合わせます。こうして殉教者を育んだ教会の姿が、いまの教会を照らし、そのメッセージをこころに刻むことができます。

ペトロ岐部と 187 殉教者
― 日本の教会の自信と活気を願って ―

日本カトリック司教協議会
殉教者列福調査特別委員会（当時）
委員長 フランシスコ・ザビエル 溝部脩 高松司教（当時）

はじめに

ペトロ岐部司祭と 187 殉教者の列福運動を始めて、はや 25 年の歳月を経ました。遅々として進まぬかに見えましたが、いよいよ列福の実現を迎え、当初からこの運動に関係した者として、これ以上の喜びはありません。

「ペトロ岐部司祭と 187 殉教者」の列福運動は、どのようにして起こったか

日本には 26 聖人と呼ばれる「パウロ三木と同志殉教者」、16 聖人と呼ばれる「トマス西と同志殉教者」の 42 人が聖人として祭壇に上げられています。これに加えて 205 人が福者とされており、合わせて 247 人が殉教者として公認され、尊崇を得ています。ところがこの 247 人については、それぞれの事情があっての列聖、列福でした。

まず、日本 26 聖人については、幕末の日本が開国するに当たり、ローマが日本の教会の再興を願って列聖した経緯があります。同様に 205 福者も、あれほど栄えた昔の日本の教会を考え、宣教再開を希望して列福したというのが事実です。すなわち、いずれも日本の教会が運動を起こす主体ではなく、ローマの主導のもとに行われたということです。しかも、これらの殉教の大半は、1624 年以前に限られており、それ以降の苦しく厳しい殉教には触れられていません。トマス西たちの列聖は、日本の教会とあまり関係なく、ドミニコ会の主導

で始められ、列聖された人びとも同会関係に限られました。このように、247 人の共通の特徴は、前述のとおり、1624 年以前に限られていること、圧倒的に外国人司祭と当時の男性指導者が大多数であることです。

日本の教会のすばらしさを認識し、活気ある教会にすることを目指して、日本カトリック司教協議会の主導で始まったのが、「ペトロ岐部司祭と 187 殉教者」の列福運動でありました。そしてその意図は、188 人が、たんに偉い殉教者であったというより、彼らの生き方をとおして、現代日本に生きるキリスト者に、信仰をもって生きていくための示唆を与えてキリスト者のアイデンティティを深め、ひいては、日本の社会に強い影響をもたらすことができると信じたからです。そのため列福候補の殉教者は、日本全国の老若男女、とくに、模範となる家庭人や、代表的な日本人の司祭などを選択の基準にしました。また年代的にも 1630 年代の厳しい迫害の時代に殉教した代表的な人物に焦点を当てました。

候補者はどのように選ばれたか

日本の 9 教区（新潟、東京、京都、大阪、広島、福岡、長崎、大分、鹿児島）から、それぞれ代表的な殉教者が選ばれました。それまで、どちらかといえば長崎ゆかりの聖人福者が多かったように思います。しかし今回は日本の教会全体を考えるためにも、北から南まで、できるだけ全国を網羅することにしました。問題は、今回の列福運動の対象にならなかった殉教者をもつ教区があることで、これに不満が残りました。しかし委員会の負担を考えると、結果的にそれも致し方ないと思われます。また教会法では、列聖列福の請願を行う権利は、原則として亡くなった土地の教区に属するため、当該の殉教者が生まれ育った土地の教区民が熱心に運動を進めていても、他教区の福者になる場合もあるので、そこにも不満が残りました。

4 人の日本人司祭が、今回の列福の対象に含まれています。これに

関しても、なぜ4人に限るのかという不満が残るようです。実際は、これ以上選ぶことは不可能でした。一人の生涯を追って、歴史的な検証を加えたうえで文書を提出することは容易ではありません。しかし、ペトロ岐部、ジュリアン中浦、トマス金鍔次兵衛、ディオゴ結城了雪という卓越した4人の司祭は、グローバルな日本社会を生きる現代の司祭に、多くの示唆と勇気を与えるはずです。岐部神父は世界を歩いて回り、ローマまで行って司祭に叙階され、帰国して、拷問によって殉教する特異な生涯を送っています。中浦神父は少年使節としてローマを訪れ、見聞を深めたうえで司祭に叙階され、迫害が始まる日本に留まり、最後は西坂の丘において逆さつるしの刑で殉教しました。金鍔神父はマニラで叙階され、日本に潜入、長崎奉行所のお膝元で働き、妖術を使うといわれて恐れられたほど警吏を困惑させた司祭でした。足利将軍家の一族という高貴な出自の結城神父は、京阪地区を中心に信者の司牧に従事しました。

他に老若男女を含めた家庭人が集団として殉教したケースにも焦点を当てました。米沢、京都、八代などの殉教がそれに当たります。米沢の殉教は、司祭がいないという状況の中で信徒の指導者を中心として、どのように教会が保たれたかをはっきりと示してくれる殉教です。八代の殉教も同様のことがいえます。京都の殉教で光っているのは、信仰と家庭愛に勇敢に生き、殉教を遂げた女性です。京都の殉教録は、涙なくして読むことができません。

また今回の列福調査では、一家全員の殉教も優先しました。小倉、熊本、大分の加賀山一族、生月の西一家、有馬、雲仙での殉教家族などです。ディエゴ加賀山隼人とその家族の殉教は、現代のわたしたちに多くを考えさせてくれます。小笠原玄也とその妻 みや(隼人の娘)、その子どもたちの遺書は、一つの信念を貫いて生きるとはどのようなことかを読む者に問いかけます。生月、有馬、雲仙の殉教者は、一家全員が励ましあって死を選んでいます。信仰を次世代に伝えることに成功しているとはいいがたいいまの日本の教会に、考える多くの材料を提供しています。

地域教会のカテキスタ、共同体の指導者といった人たちにも焦点を当てました。天草の教会を守ったアダム荒川、長崎の「ミゼリコルディア（慈悲）の組」の頭（かしら）ミカエル薬屋（くすりや）、カテキスタとして働いたイエズス会の修道士ニコラオ福永ケイアンなどがあげられます。信徒の時代といわれてから相当の時間が経過しています。日本の教会は、聖職者中心の思考を乗り越えているでしょうか。つねに受けることに慣れた教会から抜け切れていなければ、信徒が活躍する教会の姿はみえてきません。キリシタン時代のこれらの殉教者を見るとき、現代の教会のあり方について大いに考えさせられます。フランシスコ会第三会員であるヨハネ原主水（はらもんど）は、江戸の教会の指導者でありました。上杉家の家老の一人で、フランシスコ会第三会員であったルイス甘糟右衛門信綱（あまかすうえもんのぶつな）も、米沢の教会では「談義者（だんぎしゃ）」と呼ばれ、教会の教えを伝える役割を担っていました。

列福のしくみ

よくいわれるのは、聖人になるにはお金がかかる、だから大きな修道会しか聖人を生み出すことができないということです。ここ二十数年、列福運動に携わり、司教協議会の列福調査の責任者になったわたしの体験からですが、冒頭に挙げた考えは、必ずしも当たっていません。もちろん委員には、委員会に参加するために、交通費の実費が支払われています。しかし研究費を含めて、他には一切支払われたことはありません。すべてはボランティアによって運営されています。最近になって「列福審査書」（positio）の印刷費を支払いましたし、莫大な量の「殉教者報告書」を要約して「列福審査書」を作成してくださったかたに、ほんの僅かなお礼を差しあげました。これは当然の謝礼であり、実際は適当な報酬といえる額を支払っていません。むしろ「殉教者報告書」を書きあげた人びとは、長い年月をかけて歴史を勉強し、それを書きあげるために莫大な費用と労力をかけていることを考えると、彼らの養成のために時間とお金を惜しまなかった教区

や修道会、教育機関に感謝しなければなりません。

ここで、列福はどのように行われるかを説明しましょう。

まず地方教会から列福を願う嘆願がローマに出されることから始まります。その前にその地方において、その人が聖人ではないかとの定評があり、尊崇されていることが第一条件です。ついで当該の人物が亡くなった土地の教区司教は、列福を申請するために運動を起こし、資料を収集し、それをローマの列聖省に送ります。今回の殉教者の場合は、日本の各地に散らばっていることもあり、日本カトリック司教協議会として、それをまとめて申請することにしました。日本の教会は、ローマにいる専門家に列福申請人（postulator）になっていただき、その申請人をとおして列福の段取りが行われることとなりました。そのおもな仕事は、申請人のもとに送られる莫大な資料を要約して、一冊の「列福審査書」にまとめ、列聖省に提出することです。その「審査書」は報告官（relator）をとおして列聖省長官に送られます。長官は提出された順序に従って、列福審査を省内で行います。「審査書」は、まず列聖省の歴史調査委員会に回され、可否を問います。それから同省の神学者委員会に回されます。年間 40 件を消化するのが通常であるということです。じつをいうと、ここまでこぎつけるのが最大の難関です。わたしは司教協議会の代表すなわち列福調査特別委員会委員長としてこの難関にかかわってきました。そのために何度も列聖省を訪問して、日本の実情を説明し、早めに審議に入っていただきたいとの希望を伝え、嘆願しました。そして列福の実現は、教皇自身が「よし」という承認を示さない限り前には進めないということが分かりました。司教協議会の合意をいただいて全司教の署名入りの嘆願書を作り、それを白柳誠一枢機卿にお願いして、直接、教皇ベネディクト十六世に手渡しました。

神学者委員会の手に渡ると、その意見書を 2 か月のうちに列聖省の枢機卿委員会に提出することが義務付けられているそうです。列

聖省は、長時間をかけて読むことができない委員枢機卿のために「審査書」の要約の「要約」を作成します。同委員会で承認されると、いよいよ教皇のもとに送られます。教皇が裁可すれば、列福は「教令」（Decretum）として発布されます。いま、わたしたちが期待し希望していることは、列聖省の委員会が、一日も早く188殉教者の列福を教皇に答申し、教皇がこれを裁可してくださることです。

188殉教者の現代的意義

わたしは多くの国や修道会の聖人伝を読んだつもりですが、誇りをもって、日本の殉教者を、きわめて優れた聖人に数えることができます。それは第二バチカン公会議に沿う現代の教会の生き方と、しっかりと合わせて考えることができるからです。

現代は「信徒の時代」といわれます。188殉教者の大半は信徒であり、司祭が不在の教会を生き抜いた人びとです。キリシタン時代は司祭がいなかったからこの形態を取ったとはいえません。司祭中心の教会から脱皮しようとしているのが現代です。多くの部門は信徒にお願いすることができるし、司祭は譲らないといけません。司祭は信徒とともに、現代社会に向かってどのように教会をアピールするのか、真剣に考えなければなりません。また信徒の養成を真剣に考える時が来ています。今回、列福される殉教者は、教会とは何かという問いに、大きな示唆を与えてくれます。米沢の殉教はその最たるものであり、ルイス甘糟右衛門は、当時の司祭不在の教会にあって、教会の教えを堂々と伝えた信徒会長でありました。

家庭の大切さは何度繰り返してもよい現代の課題です。現在の日本に生きる熟年の信徒の中には、自分たちの信仰を次世代に伝えられなかったと、胸を打つ人が多いと思います。それはけっきょく、自分個人の信仰でしかなく、いわゆる常識的現代社会の価値観を踏襲したに過ぎない信仰だったことを意味しているのではないでしょう

か。青年の教会離れは起こるべくして起こったのです。信仰を中心とした生き方が、わたしたち熟年にできなかった結果といえましょう。今回の殉教者を見るとき、信仰がみごとに次世代に伝わっている姿を見ることができます。有馬や京都の殉教は、現代に生きるわたしたちに、家庭とは何か、信仰をもって家庭生活を生きるとは何かを、確かに伝えてくれています。熊本の小笠原玄也夫妻とその子たちの遺書を読むとき、いのちを賭してでも家庭愛と信仰を貫きとおすという決意を、その中に読み取ることができます。

同様に、今回列福される殉教者には、輝いている女性が多くいます。久しく男女共同参画がいわれていますが、女性の真の美しさ、強さをこれらの殉教の中に読み取ることができます。女性なしに現代日本の教会はないといっても過言でない現状にあって、信仰に生きる女性に大きな希望と慰めを与える列福であるといえましょう。

現代はグローバル化の社会です。世界的視点に立って、ことを判断し、福音を伝える必要があります。日本の教会も貰うばかりの体質からの脱皮が求められています。多くの宣教師と多くの物資を貰って育った日本の教会は、いまや大人として成熟した教会に向けて歩もうとしています。その先頭に立つ司祭たちは、率先してその道を歩まなければなりません。そのために、日本の風土に生まれ育った司祭たちは、現代社会の必要にこたえるべく、聖性と学識、どこででも働く気概と勇気、あらゆる困難にもめげない忍耐と剛毅などが求められています。岐部神父のスケールの大きさ、中浦神父の忍耐、金鍔神父の豪胆さ、結城神父の繊細さ、いずれも現代に苦労して生きる司祭への示唆あふれるメッセージです。同様に、世界に向けて宣教師を送った当時の日本の教会のあり方を、真剣に考える時が来ているといえるでしょう。

結びに

ペトロ岐部司祭と187殉教者の列福を目前にして、わたしたちは胸を張り、誇りをもって日本の教会のすばらしさを訴えたいと思います。世界に比類ない殉教の歴史は、日本の教会の誇りです。188殉教者の列福を機に、日本の教会において殉教者への熱い想いを込めた尊崇が生まれることを期待して止みません。

『家庭の友』（発行サンパウロ）2006年5月号掲載の記事を改定して掲載

「殉教者を想い、ともに祈る週間」
改訂版に寄せて

日本カトリック司教協議会
列聖推進委員会
委員長 パウロ 大塚喜直 京都司教

ペトロ岐部司祭と187殉教者の列福式は、2008年11月24日、長崎ビッグNスタジアムにおいて、教皇庁列聖省長官 ジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿臨席のもと、白柳誠一枢機卿の主司式により、約3万人の参加者とともに挙行されました。現在は列聖運動が継続中であり、一刻も早い列聖が待たれます。当委員会は、列福10周年に当たる2018年、2006年に刊行した「殉教者を想い、ともに祈る週間」の改訂版を皆様にお届けすることにいたしました。

「日本の教会は、尊い殉教者の血を土台に建てられました」。教皇聖ヨハネ・パウロ二世が、1981年に長崎で司式したミサの説教で述べたことばです。これをきっかけに、ペトロ岐部と187殉教者の列聖運動が始まったことは、よく知られています。他方、殉教には迫害や死刑など残虐で陰惨なイメージがつきまとい、重いテーマと受け取られがちです。しかし、殉教とは恐ろしい拷問に耐えて死んだというところに偉大さがあるのではなく、また現代のわたしたちも殉教者の死を顕彰するものではありません。殉教者から学ぶべきは、迫害に直面し、最後に殉教者になった人たちの信仰です。したがって、殉教者の死に方にではなく、生き方に注目しなければなりません。

2017年2月7日に列福されたユスト高山右近をとおして、殉教者とは神のために勇敢に散った英雄というより、むしろギリシャ語のmartyr「あかし人」という原意のとおり、神の愛のあかし人であるこ

とが明瞭になりました。流罪の地マニラへの旅の間、右近は自らの信仰の堅固さを示したいという誘惑に勝ち、「殉教への積極的な望み」と「ただ、ゆっくりと死へ追いやられる状態にさらされること」との違いを悟り、「継続する殉教」を完成しました。こうして、右近が神をあかしするのではなく、右近の生涯と死をとおして神が自らをあかしされる殉教のかたちが鮮明に記憶されました。

今年は明治維新から 150 年。福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者も、禁教下で 250 年間潜伏し、脈々と信仰を伝えた数世代の信徒たちも、いのちをかけて信仰を生きました。そして、再来日を果たした宣教師を迎え、再び激しい迫害にさらされた長崎浦上の信徒たちは、四番崩れと流配によって、また信仰のためにいのちを落としました。その同じ信仰の血が、現代のわたしたちに脈々と流れていることを忘れることはできません。今、わたしたち日本の教会は、ザビエルの来日から始まったキリシタン時代、そして 250 年の禁教時代、さらに明治の再宣教から現代にいたる日本のキリスト教史のなかで、神が日本のために備えてくださった驚くべき救いの歴史を振り返えるときです。

改訂版として再びお届けする「殉教者を想い、ともに祈る週間」を手に取り、語りかけるあかし人たちに耳を傾け、その息づかいを感じてください。また同時に、188 人の列聖が実現するよう願いながら、その取り次ぎによる奇跡を願いましょう。そうすれば、必ずや勇気と励ましを受けることができると確信してやみません。父である神は、必ず福者の取り次ぎを聞き入れてくださいます。

日本の教会の霊性
― 祈りに入る準備のために ―

霊性とは

カトリック教会が用いる「霊性」という用語は、イエス・キリストがもたらした救いの福音を、それぞれの人間がどのように受け入れ、どのように日々の信仰生活に生かすかを表すことばです。

イエス・キリストがもたらした救いの福音は、一つです。しかし福音は、歴史的な背景や文化、価値観など、さまざまな具体的状況の中で多様な形で受け止められ、いろいろなしかたで表現されてきました。

フランシスコ・ザビエルの宣教以来、今日まで、日本人は、伝えられた福音を独自の形で受容してきました。過酷な迫害と殉教、長い潜伏という日本の教会固有の出来事をとおして与えられた神のめぐみは、この地域教会に根を下ろし、独自の霊性を形作りました。神の国の実現を目指して旅する神の民である教会は、時折、その歩を休め、神の救いの歴史を思い起こし、記念するよう招かれています。

そこで、ペトロ岐部らの列福 10 周年を機に、日本の教会をとおして実現された神の救いの歴史を思い起こし、その遺産である霊性を確認し深めることは、未来の教会への希望につながります。

わたしの「記念」として

イスラエルの民にとって、過越（すぎこし）を記念することは、最も重要な掟でした。「この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない」（出エジプト 12. 14）。イスラエルの民が奴隷として苦しみ、絶望の淵にあった、まさにそのとき、神は驚くべき方法で民を救い出してくださいました。それを繰り返し記念するたびに、イスラエルの民は、勇気づけられ、希望を確かなもの

にしました。

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」（ルカ 22. 19）。イエスは、救いをもたらす過越の神秘を聖体の秘跡に託し、新しい「記念」としました。「わたしの『記念』として」と訳されるギリシャ語の「アナムネーシス」（記憶、想起、記念）は、ただ「思い出す」以上の、いっそう豊かで生命力にあふれる内容をもっています。

記念には、力があります。記念を行うとき、長い時の流れを超えて、その出来事が今、ここに再現され、人に生きる力を与えます。寝食を忘れて教え、人びとに仕え抜いて苦しみを引き受け、死んで復活したイエスは、いまもわたしたちとともにいてくださいます。感謝の祭儀のたびに、このことをいつも念頭に置き、忘れないようにこころに刻むようにと、イエスは望まれました。

イエスが、わたしたちに与えた「記念」には、三つの内容と働きが宿っています。イエスの十字架と復活の出来事を思い起こし（過去）、いまのわたしたちの生活を照らし（現在）、あすへの確かな希望に生きる（未来）のです。キリスト者の生き生きとした信仰生活は、「イエスを記念する」ことから生まれてきます。

このような共通の記念を祝うことなしに、共同体を生み、育て、自己理解を深め、属する人びとの絆を強めることは困難です。初代教会から大切にされたことは、イエスの記憶を共同体の共通の記憶（アナムネーシス）として保つことでした。教会に与えられた信仰は、個人の記憶より、むしろ共同体の記憶の上に成り立ちます。主の日の集まりとミサも、福音書の編さんも、共同体の共通の記憶を生きるためでした。

日本の教会の「共通の記憶」を保つために

2001 年 3 月 31 日、教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、日本の司教たちに向けて、つぎのように語っています。「日本の教会の最初の世紀は、殉教者たちが示した勇気と神への忠実さという信仰の消えないしる

しによって飾られました。その英雄的なあかしは、日本の教会の過去を、十字架につけられた主の輝きで飾るだけではなく、いまの日本の教会の歩むべき道と、将来の使命と約束をも示しています」。また教皇フランシスコは、日本の司教団に宛てた 2017 年 9 月 14 日付の書簡で、つぎのように述べています。「日本の殉教者たちは、いつもわたしの心の中に特別な位置を占めています。… 1600 年から 1800 年代中ころまで、キリストを否定することなくその信仰を密かに守り抜いた、いわゆる『潜伏キリシタン』はどうでしょう。ついこの間、わたしたちは信徒発見 150 周年を記念したばかりです。国籍も社会階級も年齢も異なる多くの殉教者や証聖者※たちは、皆同様に神の御子への深い愛をもっていました。社会的な地位も何もかも、ただ『キリストを得るため』（フィリピ 3. 8）に捨て去ったのです」。

ここに日本の教会が記念して生きる「共通の記憶」があります。それは、福音を受け入れ、その道を歩み、あかし（殉教）した多くの信者たちの信仰の出来事です。これは、日本の教会がもつ霊性の源泉なのです。

この手引きは、ペトロ岐部司祭と 187 殉教者の列福 10 周年を機に、わたしたちが、日本の教会の「共通の出来事」を思い起こして「記念」し、その独自の「霊性」を深めるための一助として準備されました。この冊子は、読むためというより、祈るためのよすがとしていただくために作られています。

※証聖者＝迫害時に当局者の前で敢然とキリスト信仰を告白して苦難を受けた者のうち、生命を奪われなかった者。

第１日　殉教者があかししたもの

「殉教者の血は教会の種子となる」

（マルチリオの勧め）

ヨハネ 12. 20-24、15. 14

解　説

寛政年間（1789-1801）に長崎の浦上で没収された書き物が、3 冊残されています。「マルチリオ（殉教）の鑑（かがみ）」、「マルチリオの勧め」と「マルチル（殉教者）の道」です。これらはキリシタン全盛時代、司祭が不在になっていく時代、まったく不在の時代と、それぞれ異なる状況のもとで書かれた書物です。いずれも激しい迫害の中で、何を支えとして生き、どのように信仰をあかししていくかの心得を記しています。

イエスに従う道、キリスト者の霊性は、さまざまです。そしてその土台は、一つ。福音に生き、福音をあかしすることです。イエスは、わたしたちが、全世界に行って福音を宣べ伝えるよう（マルコ 16. 15）望みました。福音宣教、すなわち「信仰のあかし」は、たんなる情報伝達ではありません。生き方そのものです。神がもたらした喜びを、いのち全体をかけて伝えるのです。キリスト者は、どのような生き方をしたとしても、それが福音のあかしになっているはずです。その頂点は、いのちをかけたあかしです。イエス自身が、いのちをかけて神の愛を示してくださいました。イエスは、神の愛の最高のあかし人、最高の殉教者です。ですから、「愛のあかし」である殉教は、キリスト者の多様な生き方の一つなどではありません。その源泉であり頂点なのです。

使徒に召された人びとは、信仰のためにいのちを捧げました。その後継者である司教も、その生き方を約束した人びとです。またそれぞれのしかたで「使徒職」に召された信徒も、そのような覚悟で取り組

むよう求められます。こうして、いのちをかけた信仰のあかし、すなわち殉教が、教会の礎になったのです。

「教会は迫害をもってしても衰えず、かえって、いよいよ栄えた。その教えるところは、殉教者の血が、キリスト者の種子となる、ということである」（テルトゥリアヌス）。殉教をとおして、教会に新しい信仰が芽生えました。今日まで日本の教会が続いているのは、わたしたちの先達たちが苦難のうちに蒔いた種子が、実っているからです。同様にわたしたちが、いま苦労して蒔く種子は、いつかきっと実ります。

福者ディエゴ加賀山隼人（† 1619）は、主君 細川忠興から命じられた転び証文への署名をきっぱり断っています。その娘 **福者マリアみや（† 1636）**の夫、**福者小笠原玄也与三郎（† 1636）**は、「忠興様、あなたが何と仰せられても、わたしは転ぶことはできない」と宣言しました。このように、不退転の意志をもってイエスに従う生き方を選ぶこと、これがいのちがけのあかし、すなわち殉教です。「この世にあって神に由来する単純さと純粋さをもって生活してきたこと、これこそわたしたちの誇りであり、良心のあかし、殉教です」（マルチリオの鑑）。

黙想の要点

1. 信仰の喜びのあかしを聞いて感動したことがありますか。それはどのようなものでしたか。
2. どのような信仰の喜びの体験を、他の人に伝えたいと感じていますか。

祈　り

すべての人の救いを望まれる神よ、わたしたちに、いのちをかけて殉教者があかしした福音を悟らせてください。すべてに超えてあなたに信頼する喜びに満たされて生きることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

第２日　殉教者のあかしから生まれ育つ教会共同体

「この迫害により、この小さな群れが、さらに小さくなりました。にもかかわらず、あわれみに満ちた豊かな恩恵を与えてくださった主に感謝が捧げられますように」

（セバスティアン・ヴィエイラ）

ローマ 5. 1-11、エフェソ 6. 18-20

解　説

キリストの教会は、その誕生から 300 年以上、激しい迫害にさらされました。それでも信者は、息を潜めて地下に潜るように生きたわけではありません。それどころか、弱い立場にいたキリスト者が、同じ弱い人びとに奉仕することにより、イエスの福音が真に人を幸せにすることをいのちがけであかししたのです。その奉仕は、いわゆる人道的な社会活動とは異なります。それは、つねにみことばを伝えることと一つに結びついています。余力のある金持ちが、貧しく弱い人を助けるようなものとも違います。物質的に余裕があったから、または他より優れた知識があったから、弱い人を助けようとしたのではありません。神の愛をあかしする奉仕です。

そのありさまは、迫害の中にあったキリシタン時代の日本の教会も同じです。至るところにできた「組」は、苛烈を極める迫害から逃げ回るどころか、貧者や病者の世話に励み、神の福音の真価を伝えました。そのいのちがけのあかしが、人のこころをとらえ、迫害を覚悟で入信する人、司祭職を志願する人を生みました。こうして教会全体が、あかしする共同体になり、一人ひとりを支えました。この共同体は、潜伏時代を耐え抜くまでに成長しました。

では、なぜこのような愛のわざが可能になったのでしょうか。それは、キリスト者が、決して自分の力に頼らず、神だけを頼りにした生き方を身につけたからです。

「二つのことを覚えなさい。一つは、決して自力に頼らないこと。この世の風評をもとに考えてはいけません。ただただ神様のみわざのみをまず想い、次いで自分の魂のこと、そして天国に至る道のことを考えなさい」（マルチリオの心得）。自力ではなく、神にまったく信頼する生き方が、人びとのこころを引き寄せ、教会共同体を生かし、成長させることになりました。

黙想の要点

1. 殉教者が残したメッセージの中で、共感するものは何ですか。
2. 生涯のなかで、イエスの福音の喜びに捉えられたことがありますか。それを、どのようにあかししましたか。

祈　り

祈りにこたえてくださる神よ、あなたは、激しい迫害にさらされ、自分の力に頼ることができないと悟った信者たちを守り導いてくださいました。さまざまな困難の中で生きるわたしたちにも、ただあなたの愛だけに信頼し、希望を失わずに生きるめぐみをお与えください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

第３日　あかしする教会によって支えられたキリスト者

「へりくだるこころこそ大切です。信仰を貫き、いのちを捧げることは、もはや人間の力を超えた事柄であり、神の助けなくして殉教はできません。殉教するためには日ごろから神の教えに忠実であろうとすることが大切です」。
（福者ルイス甘糟右衛門）

ルカ 22. 31-32、使徒 20. 18-35、ローマ 4. 17-25

解　説

冒頭の一文は、米沢の**福者ルイス甘糟右衛門信綱**（**† 1629**）が、殉教を控えた仲間に送ったことばです。右衛門を中心とする米沢の信徒たちは、「聖母の組」「ご聖体の組」と呼ばれる組織によって支えられていました。右衛門はこれらの組を統括する惣親として奉仕しており、二人の息子は、それぞれの組の親になりました。米沢には、司祭が常駐しておらず、共同体は信徒によって運営されていたのです。「組」は、定期的に集会を開き、霊的読書と祈り、信仰の分かち合いをしていました。右衛門とその息子たちは、惣親として親として、皆に良い勧めを与えるなどして信徒の信仰生活を支え、多くの人を信仰に導きました。右衛門の勧めは、親談義として広く知られていました。迫害が始まる 1628 年当時、米沢には一説によれば、３千人以上の信者がいたとされます。その信徒たちは、内向きな信仰生活を送っていたわけではありません。「組」をとおして、慈悲のわざと呼ばれる福祉活動に励んでいました。信者たちの社会貢献を高く評価した上杉家は、迫害にやっきになる江戸幕府に対して、自分の領内にはキリスト信者は一人もいないと報告しています。

1629 年 1 月 12 日早朝、雪の北山原で右衛門らが処刑されるとき、奉行は、詰めかけた人びとに呼びかけました。「この者たちは、ただ信仰によっていのちを捧げるのであるから、処刑の時、ひざまずいて

もらいたい」。

福者ヨハネ原主水胤信（† 1623）。手足の指を切られて生きるその姿を、「自らの苦難と嘲笑と人びとへの怖れをいよいよ大ならしめんがために放たれし人」と、フランシスコ会司祭 ルイス・ソテロの報告書が紹介する人は、浅草の信者たちへの霊的世話に晩年を捧げました。

「体は不自由になり、働けないので苦しみながらも、いつも天上の楽しみに浸っていた」（1615 年報告書）。その体で生きていることで、主水は、キリストの十字架の神秘を仲間たちに垣間見せました。「火炎が激しく襲いかかったとき、主水は、特別に大切なものを抱きかかえるように炎に腕を廻した。その姿は、ひときわ人目を引き、大きな勇気を示すしるしとなった」（1624 年報告書）。主水に激しく働きかけた神のみ手が見えてきます。

「おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい」（一コリント 7. 17）。信徒は、「自分自身の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけ」「こうして信仰・希望・愛の輝きをもって、とくに自分の生活のあかしをとおしてキリストを他の人びとに現すのである」（『教会憲章』31）。

黙想の要点

1. 困ったとき、信仰の仲間に祈りを依頼するなど、助けを求めたことがありますか。
2. どんなとき、教会共同体の祈りによって支えられていると実感しますか。

祈　り

いつくしみ深い神よ、あなたは、迫害にさらされる教会に慰めと希望をお与えになります。いまも小教区や地域の教会のために信仰と善意をもって仕える多くの奉仕者を支えてください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

第４日　殉教者を育んだ家庭

「おじ様たち、お母様をお叱りになっていますが、お母様一人がそうさせたのではございません」

（福者小笠原くり）

ルカ 9. 46-48、マタイ 18. 1-4

解　説

熊本地方を治める大名 細川忠興（ほそかわただおき）は、幕府の動向に敏感であり、家臣に棄教を強制しました。細川家の家老の三男である**福者小笠原玄也**（**† 1636**）、妻の**福者マリアみや**（**† 1636**）とその家族にも棄教を迫りました。しかし、玄也は信仰を表明してはばからず、そのために禄を失い、農村に住んで貧しい生活にあえいでいました。細川氏の熊本転封にともない、彼らも小倉を去り、熊本に一軒を与えられました。しかし、そこでも生活苦はつきまといました。にもかかわらず、玄也は、信仰を公然と表明していました。ついに訴人（そにん）が出て、主君細川忠利にも一家を保護することは、もはや不可能になり、家族全員を座敷牢に閉じ込めました。座敷牢にあった 50 日の間に、彼らは 16 通の遺書を書き残しました。信仰の思いをつづったこれらの遺書は、読む人のこころを打たずにはいません。

「宗旨（しゅうし）を代えよ、とのお達しに対して、永遠のいのちを捨て去るには忍びないと申したところ、11 月 4 日に、入牢の次第となりました」（小笠原玄也）。永遠のいのちに代わるものは何もないと信じている一人の信仰者の姿が、ここにあります。そのために「上下 15 人入牢しました」と淡々と述べているのです。そこに、信仰を第一に考える父親の姿を見ることができます。子どもたちは、父親の一貫した姿勢を見て育っています。

「女性でありながら、このような死を受けることができる。何とありがたいことでしょう。ことばに表すことさえできません。捨てる

ことができない教えですので、このような事態になりました」。このように書き残した妻 マリアみやの父は、小倉で殉教した**福者ディエゴ加賀山隼人**（**† 1619**）です。みやは、一人の女性として殉教の栄光を受けることに感謝と誇りを感じています。「何とありがたいことでしょう。ことばで表すことさえできません」とは、彼女のいつわらない心境なのでしょう。叔父たちは、子どもたちまで巻き込んだのは母親みやのしわざだと思い込み、みやを非難しました。これに対して次女 **福者くり**（**† 1636**）が、母親を擁護したことばが、冒頭に挙げた一文です。自分たちは、母親が強制したから死ぬのではない。自らの意志で、あえて殉教を選んだのであって、母親を責めないでほしいと訴えています。子どもたちの遺書には、この世に残る人びとへの深い愛情と自ら選んでいく死への思いが書きつづられていて、とても感動的です。

子どもは、親の信仰を見て目覚め、信仰に生きることを学びます。教会に子どもがいない、青年が来ないと嘆く前に、親自身がどんな価値観をもって生きているかを問いかけることから始めるほうが大事です。信仰を次世代にしっかりと伝えるには何が必要でしょう。大人の世代は、このことを真剣に考える時期にきています。子どもは親の背中を見ています。いま問われているのは大人の世代であり、子どもに責めを負わせてはいけません。

「入会の動機は、わたしの自由な決心です」（**福者ペトロ岐部**（**† 1639**））。19歳の岐部は、イエズス会入会をこのように決意しています。自らの自由意志で決心して入会したいと述べています。子どもは親とともに、青年は霊的同伴者とともに、人生の大切な決断を行うことができたら、どれほど幸せでしょう。大切なことは、一人の青年が人生の大事な決断を神の前で行うことです。そして、その決断に至るまでの道程をともに歩む大人が必要です。

黙想の要点

1.毎日、家族揃って祈るようこころがけているでしょうか。

2.毎日、こどもたちや妻・夫のために真剣に祈る時間を取っていますか。

祈　り

家族のきずなの中でわたしたちの信仰を強めてくださる神よ、あなたを信じて生きる一人ひとりが、家庭の営みをとおして社会に福音を伝えることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

第５日　女性の召命と使命

「女性でありながら、このような死を受けることができる。何とありがたいことでしょう。ことばに表すことさえできません。捨てることができない教えですので、このような事態になりました」

（福者小笠原みや）

マタイ 15. 21-28、ルカ 8. 19-21、ヨハネ 19. 25-27

解　説

女性には、この世にいのちを誕生させるめぐみと力が与えられています。さらに母親は、授かった新しいいのちを守り、育む喜びと使命も与えられています。同時に、人として、妻として、母として家族のために苦しみ、涙することも受けいれなければなりません。さらに、その祈りと犠牲の模範によって、授かった子どもたちに永遠のいのちについて教え、信仰を養う使命をも受けています。

福者ディエゴ加賀山隼人（† 1619）の長女で、細川家の家老の三男、**福者小笠原玄也（† 1636）**に嫁いだ**福者小笠原みや（† 1636）**は、信仰に生き、信仰に殉じた女性として、また妻として母として、模範を示しました。

夫 玄也は、家族、奉公人とともに、領主 細川忠利の命により、熊本の禅定院（ぜんじょういん）において斬首され、殉教しました。

細川忠利の父 細川忠興によって禁教令が出されたとき、玄也は、「忠興様がどのようにお命じになられましても、信仰を捨てることはできません」と記した宣言文を提出するほどの堅い信仰を表しました。こうして玄也は、殉教に至る真のキリシタンの姿を示しました。これには、妻みやと、その父加賀山隼人の影響が大きかったといわれます。

みやは、夫、子どもたち９人、奉公人４人とともに捕らえられました。殉教するまでの 50 日間、座敷牢にあって 16 通の遺書を書き、こころ

の準備をし、親しい人びとへの感謝の気持ちを表しています。

冒頭に示したみやの遺書の抜粋、「…このような死を受けることができる。何とありがたいことでしょう。…捨てることができない教えですので、このような事態になりました」との淡々としたことばには、みやの揺らぐことのないひたむきな信仰、決然とした意志と決意がにじみでています。

188 人の殉教者の記録を見ると、幼い殉教者の傍らには殉教をともにする母親がいました。イエスの十字架の傍らに立つ聖母マリア（スタバト・マーテル）のように。わが子とともにあり、ともにいのちを捧げた母がいました。

1619 年の京都大殉教による 52 人の殉教者の中には、12 歳以下の子どもが 11 人おり、その中に 2 歳から 4 歳の子が 6 人いました。**福者ヨハネ橋本太兵衛（† 1619）**と、身重であったその妻 **福者テクラ（† 1619）**は、5 人の子どものうち 3 人とともに、一本の十字架に縛られました。すなわち 3 歳の**福者ルイサ（† 1619）**を腕に抱き、右側には 12 歳の**福者トマス（† 1619）**、左側には 8 歳の**福者フランシスコ（† 1619）**が縛られました。あとの 2 人の子ども、**福者カタリナ（† 1619）**と**福者ペトロ（† 1619）**は、隣の十字架に縛られました。娘カタリナが、炎に半ば焼けた身体を母親の方に向けて「もう何も見えなくなりました」と言ったとき、母テクラは、「そんなことは心配しないで。イエス、マリアのみ名を呼びなさい。もうすぐパライゾ（天国）に着きますよ」と励ましたのです。そして、他の子どもたちを励まし、やがて火刑が終わったとき、テクラの腕は 3 歳のルイサを固く抱いたままでした。母として、子どもたちにとっての真の幸福が何であるかを確信するからこそ、子どもたちと苦難をともにできたのです。

八代の殉教者の一人、7 歳の**福者ルドビコ南（† 1603）**は、父の殉教の後、母とともに捕らえられ、処刑場に向かう駕籠の中でも、母と一緒でした。ルドビコ少年と母 **福者マグダレナ（† 1603）**の十字架は、向かい合って立てられました。母が「イエス、マリア」と言うと福者

ルドビコも同じように「イエス、マリア」とこたえて、息を引き取るまで続けました。幼い子は母と同じくすることに安心してすべてを委ねることができました。それは日々、母の祈りとことば、行いによって培われた幼子の澄んだ信仰でした。

黙想の要点

1. 小笠原家の女性たちの、どのような生き方に共感しますか。
2. 京都の殉教者 橋本テクラが、その子どもたちに示した模範のどこに共感しますか。

祈　り

すべての人の救いを望まれる父よ、家庭の中で生きる一人ひとりが、十字架上のイエスに最後まで付き添われた聖母マリアにならい、互いに寄り添い、祈り合いながら、信仰を深めるめぐみをお与えください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

第6日　明日の教会を託される子どもたち

「わたしを歩かせてください。イエス様はカルワリオ山へ歩いて行かれました」

（福者ディエゴ林田）

ルカ 10. 21-22、マタイ 19. 13-15

解　説

1613年10月7日、長崎の島原半島、有馬川の中洲で、3家族8人が柱に縛られ、火あぶりの中で殉教しました。

信者たちの信仰生活を助けるために、「サンタマリアの組」、「ご聖体の組」、「ミゼリコルディアの組」などを組織していた有馬の教会は、当地で迫害が始まると、1612年、城下町に新しい組を結成しました。「殉教の組」です。これは信者が殉教できるよう祈り、苦行をもって神のおん助けを求める信心会です。これに倣い、少年たちも「子どもの殉教の組」をつくり、大人に負けないほど熱心に祈り、苦行に励んでいたといいます。12歳の少年 **福者ディエゴ林田（† 1613）** は、このとき、有馬の「子どもの殉教の組」の頭（かしら）でした。ディエゴは、仲間とともに殉教のめぐみを受けるために祈り、組の集まりでは皆を導き、ともに苦行に励んでいました。その殉教の記録は、素朴なこころの少年が、精神的に立派な大人に成長していたことを伝えています。

有馬の信者たちが殉教に立ち合おうと集まってきて、捕らわれた人びとをすでに殉教者と呼び、その取次ぎを求めました。するとディエゴは、「死ぬ前に殉教者の名はふさわしくありません。でもその名前をいただくのは嬉しいことです」と言いました。そして、「まだまだです。まずオラショ（祈り）を頼みます」と、皆の祈りによる支えを願ったのです。のちに迫害で火あぶりにされたドミニコ会司祭ハシント・オルファネル神父は、ディエゴのこのことばを日本語のまま記録しています。

ディエゴのこれらのことばは、長崎の潜伏キリシタンが殉教の心得として伝えてきたことを思い起こさせます。「殉教とは死ぬこと、殉教は神からのめぐみであること、人は皆弱いので、殉教のとき力を与えられるよう、ふだんからいつも祈りと苦行に努めること」などです。

日之江城の前を流れ有明海に注ぐ有馬川の中洲で処刑が行われることを知った信者たちは、ろうそくとロザリオを手にして集まり祈りながら、川の両岸で見守っていました。

川を渡るとき、一人の役人がディエゴを背負って渡ろうとしました。すると、「わたしを歩かせてください。イエス様はカルワリオ山へ歩いて行かれました」と、ディエゴは、それを断りました。十字架の苦難を経て栄光へと変えられる救いの神秘を、神は、幼い子どもに示しておられたのでしょうか。殉教が、イエスに導かれる至福への道であると、彼らは信じていました。少年は、パライゾ（天国）でイエスとともに永遠の幸せが待っていることを教えられ、疑うことなく信じていました。だから、イエスがなさったように、歩くことを選びました。

夫 **福者レオ林田助右衛門**（† 1613）、妻 **福者マルタ**（† 1613）、姉娘 **福者マグダレナ**（† 1613）、そして弟ディエゴは、それぞれの柱に縛られ薪に火がつけられました。

「聖なる少年ジャコベ（ディエゴ）の両手をくくった縄も焼かれた。火が襦袢や下ばきや髪の毛に移ると、イエスの甘美なみ名を唱えながら母のもとに駆け寄った。すると母が天を仰ぐように祈り、少年は、母の傍らで創造主の御手にその魂を委ねた」。殉教報告は、このように伝えています。姉のマグダレナは、綱が焼け落ちるとひざまずき、足元の燃える薪を手にとって頭上にかざしました。こうして、燃え尽きることのない信仰と感謝のしるしを示すと、力尽きて静かに横たわったのです。

有馬の教会の最初のあかしは、神が信仰の神秘を「幼子のような者にお示しになった」（ルカ 10. 21）ことを示して、それによって、教会がイエスとともに喜びにあふれて感謝することを教えています。

黙想の要点

1. 殉教した子どもたちは、どのような希望をいだいて、信仰のためにいのちを捧げたと思いますか。
2. 家庭の中で、子どもたちの集いの中で、どのように信仰を伝えていますか。

祈　り

天地の主である父よ、あなたは、幼い殉教者たちに天の国を示してくださいました。わたしたちにも、自分の十字架の道をとおして、至福に至る勇気をお与えください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン。

第７日　羊のためにいのちを捧げた司祭・修道者たち

「わたしは、自分の召し出しに満足しています。そして自分自身と同胞の救いのために前進しようという大きな希望を抱いています」

（福者ペトロ岐部）

「岐部ヘイトロは、転び申さず候」

（宗門奉行 井上筑後守の調書）

ヨハネ 10. 9-11、17. 5-26、21. 15-19、ヘブライ 5. 7-10

解　説

188 人の殉教者の中で、司祭は**福者ペトロ岐部（† 1639）、福者ジュリアン中浦（† 1633）、福者ディオゴ結城了雪（† 1636）、福者トマス金鍔次兵衛（† 1637）**の４人。他に１人、**福者ニコラオ福永ケイアン（† 1633）**というイエズス会の修道士がいます。彼らの根底には、力強く波打つ共通のこころが脈々と流れています。それは、いのちをかけて福音の喜びを伝える気概、主から託された羊の群れを、死んでも守り抜く牧者のこころです。その務めのほかは一切、眼中になく、神と人に献げつくす雄々しさ、自分の才能でなく、知識でなく、神だけに頼り抜くひたむきさでしょう。しかもそれは、浮き立つようなきらびやかさや英雄の姿とは、およそ縁遠い、一途な姿です。

ペトロ岐部は、水軍の家系に生まれ、1600 年に有馬のセミナリオに入りました。のちに追放令のため、他の仲間たちとマカオに移ります。かの地では司祭への道が閉ざされたため、ペトロ岐部は、1617 年にマカオを出てインドへ行きました。そこでも叙階が叶わなかったので、ローマへ行く決心を固めました。らくだの隊商に入れてもらい、シリアの砂漠を徒歩で横断し、パレスチナにたどりつきます。そして、

おそらく日本人として初めてエルサレムで聖地巡礼し、今度は海路、イタリアに渡り、1620年の春、ローマにたどりつきました。同年11月15日に司祭叙階。その5日後、イエズス会への入会が許されました。そのとき書いた調書の一節が、冒頭に示した「わたしは、自分の召し出しに満足しています」ということばです。

1623年3月25日、リスボンから海路、帰国を試みます。しかし途中で4回も難破。1630年に、ようやく帰国を果たしたペトロ岐部を待っていたのは、過酷な潜伏生活でした。9年に及ぶ活動の後、仙台領内で捕らえられて江戸に護送され、将軍家光じきじきの取り調べを受けたペトロ岐部は、激しい拷問により、1639年7月に殉教。ときの大目付で宗門奉行の井上筑後守政重（いのうえちくごのかみまさしげ）が残した取り調べ調書が、いみじくも彼の生涯を一語で言い表しています。

「岐部ヘイトロは、転び申さず候」

アウグスチノ会の修道司祭になったトマス金鍔次兵衛は、主から託された羊を守り抜くためには、どのような手立ても厭わない牧者の姿を体現しています。次兵衛は、訪ねて来る信者や求道者を教会の自室で座して待つ司祭ではありません。迫害の時代、みだりに歩き回れば、それだけ危険が多く付きまといます。そこで次兵衛は、奇抜な策を駆使し、さまざまな姿に身を変えて役人や密告者の目を逃れ、いろいろな地域の信徒を訪れては秘跡を授け激励し続けました。

ジュリアン中浦は、代々の城主、小佐々（こざざ）家に生まれ、1580年、後に205福者殉教者の一人になった**福者セバスチャン木村（† 1622）**とともに、有馬に開校したセミナリオの一期生になりました。ちなみにセバスチャン木村は、2年後の1582年にイエズス会に入り、1601年、初の日本人司祭になった人です。ジュリアンは、セバスチャン木村がイエズス会に入った年、巡察視ヴァリニアーノ神父によって遣欧使節の一人に選ばれました。1590年に帰国した後、秀吉に仕官を勧められるなど、あたかも時の人になりました。しかしジュリアンは秀吉

の誘いを辞してイエズス会に身を委ねたのです。そして1608年の司祭叙階から殉教に至るまで、その生涯は苦難に満ちていました。母親の猛反対を振り切るようにして遣欧使節の副使として渡欧したものの、つねに病気がち。高熱のため、肝心の教皇謁見に臨めない悲しみを味わいました。神学校での勉学の間、ラテン語の試験に2度失敗し留年の憂き目に遭いました。一時の華やかさと比べるべくもない悲痛な境遇にあっても、ジュリアンのこころを捉えて放さなかったもの、それは、高名な司祭としての名声ではありません。一牧者として羊に自分を与え尽くす一修道司祭の生き方でした。ジュリアンは、長崎で捕らえられ、1633年10月21日に西坂で逆さ吊りにされて殉教します。

イエズス会の修道司祭ディオゴ結城了雪は、武家の出らしい質実剛健な生き方を特徴としています。あまり目立たない存在ですが、江戸期で最も長く活動した宣教師の一人であり、一時は、京都の教会を一人で担ったようです。教会の運営を信徒に任せ、ひたすら聖体とゆるしの秘跡を授与するために各地を回ったと、当時の文献は述べています。こうして、司祭が激減していく教会の自立を実現しました。

ニコラオ福永ケイアンは、司祭ではありませんが、当時、説教を許され、福音宣教に情熱を燃やしました。意に反してマカオに送られ、かの地では仕事がありませんでした。しかしケイアンは他の若者のように還俗したり他の修道会に移籍したりせず、じっと耐えて帰国する日を待ちました。帰国するや、長崎を中心に、方々の信徒を訪ねて説教しました。イエズス会に入って32年目、54歳でようやく最終誓願が認められ、ほどなく殉教しました。

以上の司祭･修道者の生き方を見ていくと、現代に求められる司祭･修道者像の輪郭が次第に浮かびあがってきます。それは、司祭・修道者が、福音宣教と羊の群れの世話にいのちをかける姿です。福音宣教

は、いのちをかけてこそ、実りを見ることができることを、わたしたちの先達は、その生涯で示しています。

黙想の要点

1.あかし人、牧者の姿を彷彿とさせる司祭・修道者を知っていますか。
2.いのちをかけて福音宣教と羊の世話に打ち込む司祭・修道者のために真剣に祈っていますか。

祈　り

生きる力の源である神よ、あなたは、その民のために自分を与え尽くしたペトロ岐部ら５人の司祭・修道者をとおして、神の愛の姿を示し、信じる者に生きる力と希望を与えてくださいました。光を求める現代の教会を担うために自分を捧げ尽くす多くの司祭・修道者をお与えください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン。

第８日　秘跡に生かされる教会

「あなたには何の恨みもありません。安んじてください」
（福者ガスパル西玄可（にしげんか））

「いとも尊きご聖体は賛美されますように」
（福者パウロ内堀作右衛門）

マタイ 26. 26-30、ルカ 24. 28-35、ヨハネ 13. 1-17

解　説

「わたしたちキリスト信者は、とりえもない貧しい者ですが、神の子と呼ばれる身分にしていただきました」（1620 年島原半島の信徒からローマ教皇への「奉答文」）。洗礼によって人は新しいいのちを受け、キリストを着る者となります。しかし、わたしたちは、傷つき、壊れやすい「土の器に」（二コリント 4. 7）このいのちを納めています。人の弱さと罪は、このいのちを衰弱させ、喪失させます。

「主よ、あなたは何もかもご存じです」（ヨハネ 21. 17）。回心は神のめぐみによって始まり、このめぐみによって人のこころは神に向きを変えます。八代の**福者ヨハネ南五郎左衛門（†1603）**は、一度は信仰を捨てた若い侍でした。こころから罪を悔い、償いを果たした人にはゆるしが与えられるとセルケイラ司教に教えられ、1603 年にこころの向きを変えました。仲間の前で涙ながらに罪を告白したヨハネ南は、その後ゆるしのめぐみに人生を委ねます。同年 12 月 8 日、彼は殉教を遂げました。

「教会には水と涙があります。洗礼の水と悔い改めの涙です」（聖アンブロジオ）。どちらも再生のしるしです。神のゆるし（いつくしみ）に触れたとき、人は新たに創造されます。人びとの嘲笑と怖れのために「放たれし人」**福者ヨハネ原主水（†1623）**、キリストの「苦労人」**福者ディエゴ加賀山隼人（†1619）**。その殉教のそばには、罪のゆる

しを求める謙虚な生き方があります。「わたしは神のめぐみによって、まだ十分な健康と堅固な精神をもっています。それで毎年告白できる四千人以上の人びとが、わたしの責任に委ねられています」（**福者ジュリアン中浦（† 1633）**）。殉教の教会はゆるしのめぐみを激しく求めた教会でした。処刑する者に対してゆるしのことばを発する殉教者、迫害されながらも隣人に情けを惜しまない弾圧下の教会、ともにゆるしのめぐみを生きていたしるしです。

「すると群衆の中から走り出た一人の信者が受刑者に近づき、ご聖体の組のメダイを一人ひとりの眼前にかざしました。彼らは『ご聖体は賛美されますように』と三度唱えると、深く頭をたれメダイに接吻しました。やがて、女性と子どもから斬首されていきました」（米沢の殉教）。「執行人は**福者パウロ内堀作右衛門（† 1627）**を縛って湯の中に逆さに落としました。すぐそれを引きあげ、また投げ込む。引きあげられるたびにパウロ作右衛門は『ご聖体は賛美されますように』と唱えていました。三回目には、沈められたまま、その場に放置されました」（雲仙の殉教）。

殉教時代に入ると、イエズス会の報告書の中に「ご聖体の組」と呼ばれた信徒の活動が盛んになっていたことが伝えられています。殉教者の最期のことばは、聖体を賛美する祈りです。弾圧下の信者たちの信仰を養い、殉教に至るまで成長させたのは聖体です。無名の多くの信者たちが、殉教と聖体についての理解を得ました。「わたしは神の穀物であり、キリストの清いパンとして認められるために、獣の牙で粉にひかれるのです」（アンチオケの聖イグナチオ）。昔も今も、聖体は「キリスト教的生活全体の源泉であり頂点」です（『教会憲章』11）。

黙想の要点

1. 信仰生活は、どのような点で、秘跡によって豊かにされていますか。
2. 聖体の秘跡によって、共同体の絆が強められた体験がありますか。

祈　り

いつくしみ深い神よ、あなたのゆるしがなければ、すべてははかなく消えていき、だれも清く生きてはいけません。殉教者たちを生かしたゆるしのめぐみを、わたしたちの教会に味わわせ、そのめぐみで新たに生かしてください。また、キリストの十字架と死を記念する聖体をとおして、わたしたちの信仰を育み、あなたのいつくしみをあかしする者にしてください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン。

福者ペトロ岐部司祭と187殉教者一覧

		主な殉教者		殉教年月日	殉教地
1.八代の殉教者	11人	ヨハネ南五郎左衛門 シモン竹田五兵衛 ヨアキム渡辺次郎右衛門 ミカエル三石彦右衛門	 他 4人 他 3人	1603.12. 8 1603.12. 9 1606. 8.16 1609. 2. 4	熊 本 八 代 〃 〃
2.萩・山口の殉教者	2人	メルキオール熊谷豊前守元直 ダミアン		1605. 8.16 1605. 8.19	萩 山 口
3.薩摩の殉教者	1人	レオ税所七右衛門		1608.11.17	川内平佐
4.生月の殉教者	3人	ガスパル西玄可	他 2人	1609.11.14	生 月
5.有馬の殉教者	8人	アドリアノ高橋主水	他 7人	1613.10. 7	有 馬
6.天草の殉教者	1人	アダム荒川		1614. 6. 5	富 岡
7.京都の殉教者	52人	ヨハネ橋本太兵衛	他51人	1619.10. 6	京 都
8.小倉・大分・熊本の殉教者	18人	ディエゴ加賀山隼人 バルタザル加賀山半左衛門 小笠原玄也与三郎	 他 1人 他14人	1619.10.15 1619.10.15 1636. 1.30	小 倉 豊後日出 熊 本
9.江戸の殉教者	1人	ヨハネ原主水胤信		1623.12. 4	江 戸
10.広島の殉教者	3人	フランシスコ遠山甚太郎 マチアス庄原市左衛門 ヨアキム九郎右衛門		1624. 2.16 1624. 2.17 1624. 3. 8	広 島 〃 〃
11.島原・雲仙の殉教者	29人	バルタザル内堀 パウロ内堀作右衛門 ヨアキム峰助太夫	他 2人 他15人 他 9人	1627. 2.21 1627. 2.28 1627. 5.17	島 原 雲 仙 〃
12.米沢の殉教者	53人	ルイス甘糟右衛門信綱	他52人	1629. 1.12	米 沢
13.長崎西坂の殉教者	3人	ミカエル薬屋 ニコラオ福永ケイアン ジュリアン中浦（司祭）		1633. 7.28 1633. 7.31 1633.10.21	長崎西坂 〃 〃
14.大坂の殉教者	1人	ディオゴ結城了雪（司祭）		1636. 2.25	大 坂
15.長崎西坂の殉教者	1人	トマス金鍔次兵衛（司祭）		1637.11. 6	長崎西坂
16.江戸の殉教者	1人	ペトロ岐部（司祭）		1639. 7	江 戸

福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者分布図

京都の狗教者
（京都教区 / 52人）
米沢の狗教者
（新潟教区 / 53人）
江戸の狗教者
（東京教区 / 2人）
ヨハネ原主水、ペトロ岐部
大阪の狗教者
（大阪教区 / 1人）
ディオゴ結城了雪

この冊子は、皆様からお寄せいただくご寄付によって制作され、
無料（送料別）で配布しています。 列聖運動の関連行事のために、
皆様からの善意のご寄付をお願い申しあげます。
送金には、下記の郵便振替口座をご利用ください。

郵便振替　00120-1-451323
（宗）カトリック中央協議会列聖口
（銀行 ATM、ネットバンキングからは
ゆうちょ銀行〇一九支店（当座）9900-019-0451323）

銀行 ATM、ネットバンキングご利用の場合は、後日領収書送付のために、委員会事務局宛に住所とお名前、電話番号を電話または FAX でご連絡くださいますようお願いいたします。

殉教者を想い、ともに祈る週間　改訂版
―福者ペトロ岐部司祭と187殉教者の列聖に向けて―

2018年7月1日　発行

〈非売品〉 © カトリック中央協議会　2018年

編　集　　日本カトリック司教協議会　列聖推進委員会
発　行　　カトリック中央協議会
〒135-8585　東京都江東区2-10-10日本カトリック会館
電話　03-5632-4411（代表）
印　刷　　株式会社　東伸社

この冊子の一部または全部の無断転載を禁じます。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

50,000　2018.7.1